

食中毒、アレルギー、エイズなどの予防に寄与する 国際色あふれる研究室

食中毒やアレルギーを 予防

予防環境栄養学分野では、太田房雄教授を中心に大和正幸教員(助手)、古賀哲郎教員(助手)が、食中毒やアレルギー等の食品を介する病気の予防を目指して研究をしています。また、公衆衛生・公衆栄養学的立場から、結核、HIV及び寄生虫の同時感染の病態と微量元素(Cu, Ca, Se, Zn, Fe)の栄養・感染防御学的作用を調べています。



アリザデ・モハマド



アフエワーク・カスー

子からなる抗体)を応用して、細菌の検出や試薬の開発を行っています。単クローン抗体は大量生産が可能です。例えば体内のがん細胞を特異的に攻撃する手段、その他、腫瘍細胞等の分離・分析、臨床診断、免疫学の研究用試薬などに使用されています。

古賀教員は食中毒を起こす魚介類の中でもカニやエビなどに含まれるキチンや、キチンを分解する性質を持つ細菌である腸炎ヒストリオの研究をしています。キチンは医療、食品、化粧品、農業、衣料等、幅広い分野での有用性が注目されている物質で、それゆえキチンの分解関連酵素の研究が多く行われています。

イラン、 エチオピア(アフリカの ホープ)として留学生

太田教授の研究室には、現在4名の卒業生とともに海外からの留学生6名が学んでいます。その国もイラン・エチオピア各一名、ベトナム(4

食品を介して病気を起こす病原菌を環境から分離したり、薬用植物(ハーブ)や香辛料がどのような作用で食中毒菌を殺すのかといったことの解明、自然食品の中から食中毒の治癒・予防に役立つものを探そうとしています。例えばベトナムでは、ドクダミを生でサラダとして食べる習慣があるので、食中毒が少ないのではと太田教授は推測しています。

人の体内に直接入るとアレルギーを引き起こす物質(アレルゲン)も、口から取り入ると免疫応答が起きないという経口免疫寛容の仕組みはまだ十分に明らかではありません。マウスを使い、その仕組みの解明や、環境ホルモンがそれに及ぼす影響についても調べています。

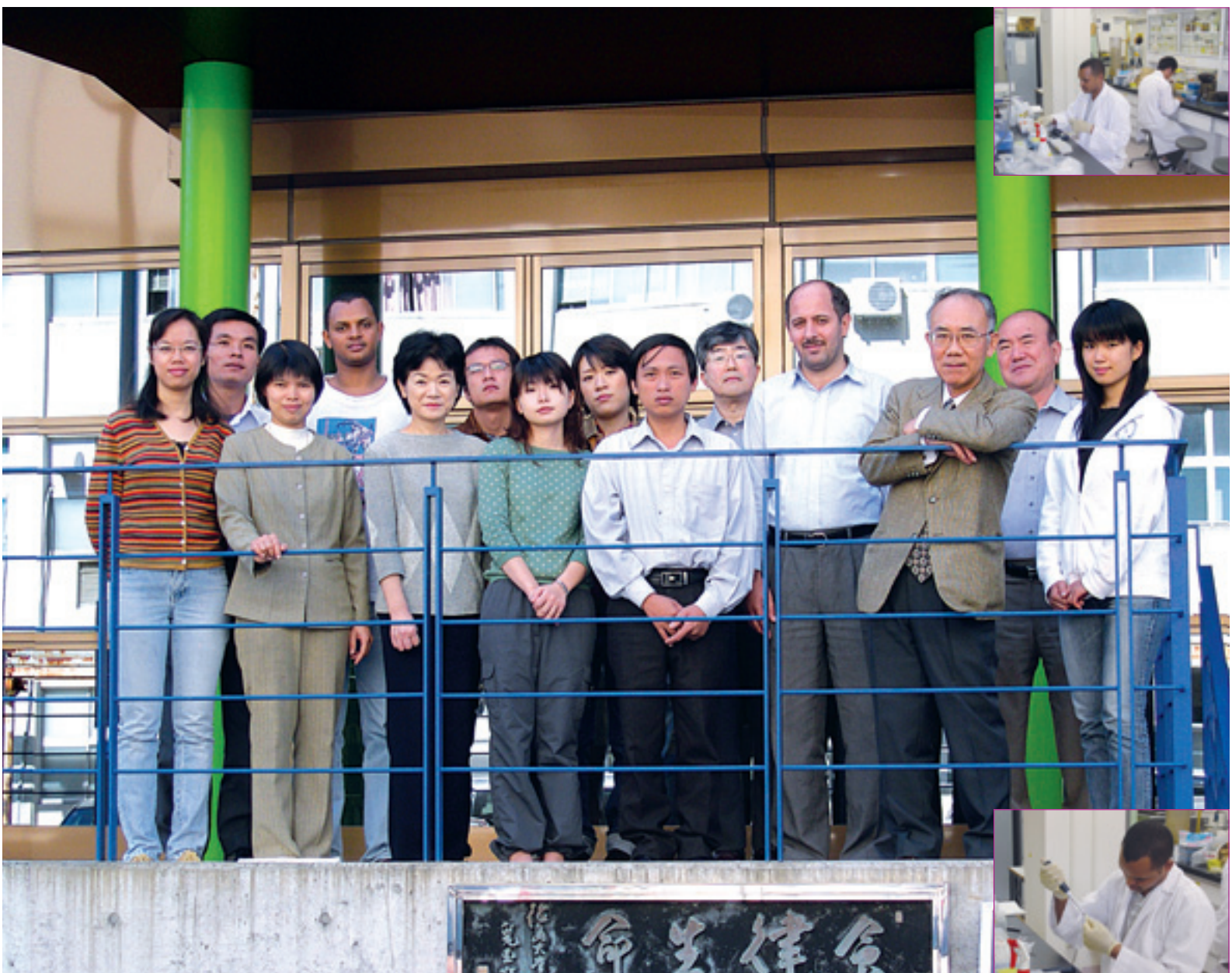
大和教員は単クローン抗体(モノクローナル抗体とも呼ばれる均一の名)とごまごまです。

今回紹介するのはアリザデ・モハマドさん(37歳)とアフエワーク・カスーさん(34歳)です。

モハマドさんはイランから家族そろってやってきました。奥さんもドクターコースで学んでいます。そして小学2年のお子さん。

イランでは大学に籍を置きながら、何でもこなす臨床医(General Practitioner)として活躍していましたが、博士の学位を取るために日本にきました。奥さんも高校の生物の先生です。イラン政府の国費留学生として留学先を探している時、たまたまインターネットで太田教授のホームページを見たのがきっかけとこのからです。不思議な縁です。

イランといえば、日本人にとっては遠い異国のような感じがしますが、「最初は日本に適應できるか心配でした。人間性や伝統を大切にすることもよく似ているんです。それに皆さんすごく仲良くしてくれたので、すぐに慣れることができました。徳島の人はフレンドリーでハッピー、子供の学校でも皆さん親切です。徳島は気候も良く風景もきれいで住みやすいところですね。また日本人がものを大切にすることに感心しました」と語るアリザデさん。研究室内では栄養と免疫の関係について研究をしています。博士号を取得すれば、国に帰って大学で栄養学の研究を続けま



ところでは、彼は、実はもともと親日家でもあったのです。というのもイランでは、かの有名な「おしん」など、日本のテレビドラマが放送されていて、よく見ていたそうです。

遠いアフリカ大陸のエチオピアからやってきたカスーさん(博士後期課程2年)も太田教授のホームページを見たのが日本への留学のきっかけとなりました。彼はアフリカで蔓延する結核、HIV(エイズ)の原因ウイルス感染、それに寄生虫感染が相互に影響しあう免疫学的修飾作用について研究をしています。また、全ての生物に極少量ですが必須な微量元素と呼ばれる

物質について、栄養学・免疫生理学的研究を工学部の本仲教授と共同で行っています。カスーさんは英語も上手、17年度には笹川科学財団から数少ない研究助成金をも受けたほです。彼を通じてエチオピアのゴンダール大学とも同様の研究題目について共同研究をしています。彼は太田教授を「ファーザー」と呼びます。

この9月までにバングラデッシュからの留学生3名が続けて無事博士号を取得して帰国しましたが、現在いる他の留学生も、みんな帰国して日本で学んだことが母国の役に立つようにと真剣に学んでいます。徳島大学がこのような形で諸外国の役に立ち、またそこから若人の輪や研究が広がっていくことは誇らしいことです。最終的に世界平和に



つながることを太田教授は望んでいます。

